

氏名	王 木易
ヨミガナ	ワン ムーイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第625号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 境界の手触り 文字から晶出／融解する共同体のイメージ 〈作品〉 The Facets of Boundaries 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三井田 盛一郎
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	O J U N
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	ミヒャエル・シュナイダー
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	

（論文内容の要旨）

本論文は「境界の手触り」と題し、社会的共同体を人工のイマジネーションの規則的反復による「社会的結晶」とみなし、その晶出（結晶化）を促す「文字」が作り出す境界のイメージについて論じた。

文字とは言語を伝達するために線や点で構成された記号である。「言語」とは一般的に音声言語と文字言語を指すが、人間社会における共同体の形成と密接な関係にあるのは後者である。筆者の制作は一貫して、伝達のための文字及び文字を媒介する複製技術を、「書く」ためではない筆記行為と、複製を目的としない版面技法という純粋な造形行為に還元することで、共同体というそれ自体が物質として存在しないものの輪郭を表出しようとする試みである。

ソシユールは、言語における話し手と聞き手が伝達する記号が表す意味は、本来的に曖昧な性質を持っているため、完全な形で概念を共有することはあり得ないとする。それでも言語活動がこれまでである程度同じ意味の伝達を可能にしていることから、言語使用者にとって共通とされる部分を「平均値」として、その平均値の上に成り立つ人々の活動を、規則性と安定性の高い要素の「社会的結晶化」と例えている。自然科学における「結晶」とは、原子や分子が、空間的に規則性を有するパターンによって繰り返し配列された物質を指し、結晶化とはある均一な溶液から固体の結晶が生成される現象のことである。ソシユールの比喻を更に発展させ、言語を結晶生成におけるパターン配列に例えると、言語使用による結晶とは、複数の人間が寄り集まって作られる共同体のことだと言える。そして、その「平均値」のパターンの繰り返しが行き着く先には、ルイ・アルチュセールのイデオロギー論における「アンテルペラシオン」（良き市民であるためには何をするべきか？）という呼びかけに繋がる。これはベネディクト・アンダーソンが「想像の共同体」と呼び、メルロ＝ポンティが「制度化」と呼ぶ現象とも類似するが、「結晶化」という言葉の特徴は、対象が「あるか/ないか」ではなく、「状態」が変化する可能性を含んでいる点である。

音声によるコミュニケーションは人間だけのものではないが、文字を使うのは人間だけであり、「文字」は、人為的に作り出された境界の一つだ。言語使用による対面交流でしか形成され得ない小単位の共同体は、文字とメディア、印刷技術を介することで、顔も知らない大勢の人間から成る大規模な共同体の形成を

可能にした。つまり複製技術は共同体という結晶生成における触媒だと言える。「複製」と「文字」は、社会的結晶の形成の条件であると同時に、人為的に洗練し続けることで、その結晶をより大きく純度の高いものに成長させることができる。

一方、絵画における「イメージ」は、言語が作り出す境界を超越すると言われている。しかし絵画の起源、すなわち人間がなぜイメージを必要としてきたのかという根源を探ると、イメージは常に「共同体」における境界の形成に加担してきたことが明らかだ。言語が共同体という結晶の生成に必要なパターンだとすれば、「イメージ」はその仕上りの姿を先立って提示することで、より巨大な結晶生成における補助の役割を持つ。イメージもまた、言語とは違う方法で境界を形成すると同時に、イメージネーションの境界それ自体なのである。

絵画における「イメージの帰属性」という問題は、日本人の血が一滴も流れていない著者が、幼少時から自身の「国籍」に属さないこの地で生活するうえで、常に向き合わなければならなかった問題である。移民、あるいはそれに近い「根無し草」のような立場の人間は、アイデンティティの形成過程において何らかの問題を抱えがちだ。筆者は、複数のコンテクストが入り混じるような環境において、自身で描いた一本の線にすら「これはどちら側のものなのか」という不安を常に抱いてきた。それゆえに筆者は、「描く」ことではなく「書く」（定められたパターンの繰り返し）行為を通して、イメージを摸索することを選択する。それはやがて「書く」（境界を形成する）行為から、再び「描く」（境界をなぞる）行為へと循環し、結果として水が気体、液体、固体と変化するように、文字という物質が状態変化していくようなイメージの表現が生まれる。

機械翻訳技術の発達により、言語による境界が次第に脆くなりつつあるのは確かである。しかし昨今の世界情勢から鑑みると、移民の増加や混血によって様々な既存の境界がゆらぎ、グローバルで多様性に富んだ価値観が主流になっているかのように見える一方で、実際にはその反動のように多くの国で保守的で排他的な力が働いている。それは大きな共同体が、それを形成する膜を崩すまいとしながらも、結晶の「純度」を落とすまいと不純物、それを形成する膜を崩すまいとしながらも、結晶の「純度」を落とすまいと不純物を排しているようにも見える。共同体は結晶のように強固な構造をもっていながら、常に自らを組み替えていく側面を持つ。

筆者は境界に立つ者として、変容する共同体の輪郭を常に第三者的な視点で観察してきた。その不可視のイメージの境界に、「描く」と「書く」ことを通じて触れていく過程を本論文で論じた。

本論文は 3 章構成で論述する。

第一章は「共同体の輪郭」と題し、絵画を巡る主体-客体の考察から、筆者がどのように表現の対象を「文字」と「共同体」としてきたのかを論じる。それは、視点を固定し、透視法（遠近法）によって対象を観察して描くという、筆者が日本で受けてきた西洋式的美術教育から出発し、「現実の境界」をなぞることから、やがて言語の境界、そして共同体の境界へと移行する過程である。

第二章は「文字から晶出する共同体のイメージ」と題し、印刷技術によって拡大する共同体にとって文字がどのように機能してきたか、また共同体を内から固めようとする権力者の意思の表象としてのプロパガンダについて論じる。芸術と権力は長い間、切っても切れない関係にあり、その関係性において芸術は実用的な道具として機能する。しかし、権力対作家、あるいは全体主義対自由主義という単純な二項対立の問題のみに注目するのではなく、むしろ道具としての芸術がその機能を失う瞬間、既存の共同体の境界がゆらぐ瞬間に、筆者は表現の可能性を見出す。

第三章は「文字から融解する共同体のイメージ：提出作品『The Facets of Boundaries』と題し、文字とイメージ、「書く」と「描く」ことの境界、及び提出作品について、アンリ・ミショーの「メスカリン・ドローイング」や菅野創+やんツー「形骸化する言語」等、筆記と描画の境目を探るような制作をする作家を引用して論じた。それが「絵」なのか「書」なのかという問題の根底に、「身体」がある。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、幼少時から日本で育った中国国籍の筆者が、文字と版画を通して自らのアイデンティティーを実感しようと模索する創作論である。

5才で家族と日本に移住した筆者は、周囲から突然遮断された言語の壁（境界）を経験する。現在の筆者は英語を加えたトリリンガルだが、この原体験が、以後の様々な境界をめぐる模索と葛藤につながっている。筆者にとって最大の境界は、中国・日本間の境界である。彼女は共同体を文字が作り出す「社会的結晶」と捉え、そこでの漢字や仮名など、本来「書く」べき文字を「描く」行為に還元しながら、“融解”“再晶出”という形での越境とアイデンティティーの創出を試みている。

第1章「共同体の輪郭」では、筆者がこれまでに感じてきた“境界”について順に述べ、共同体という輪郭（境界）に行きつくまでの経緯を辿る。自他の境界、主体と客体、画家とモデル、精神世界と現実世界、書きことばと話しことば、翻訳と誤訳など、様々な境界とそこで起こる事象について論じ、それをテーマとした自作品を解説している。筆者は確かな定点を欲しながら、境界の両側から見える景色が違うことを知っているために、境界を往き来しながら「手触り」で自らの立ち位置を確かめようとしているようにも見える。

第2章「文字から晶出する共同体のイメージ」では、「くに」や「国家」という共同体が、文字と権力、印刷物（技術）によって形成されていること。そこでのイメージの共有に、芸術が大きな役割を果たしてきたことを、古今東西の事例から論じている。筆者の祖父は戦時中、プロパガンダの木版画制作や画報編集の仕事をしていたといい、ここでとりあげる事例も中国のプロパガンダが多い。ただ筆者自身が魅力を感じるのは、文字や芸術が作り出す共同体の強固な輪郭（境界）ではなく、むしろ既存の境界がゆらぐ状況に自身の表現の可能性を感じるとする。

第3章「文字から融解／晶出する共同体のイメージ：提出作品『The Facets of Boundaries』」では、文字と線（あるいは図形）、「書く」と「描く」の間を往還した提出作品について説明する。それが、2つの共同体の間で融解と晶出をくり返す、筆者自身の姿でもあることがわかる。

複数のルーツやアイデンティティーをもつ人々の自己定位の難しさは、しばしば「根なし草」にたとえられるが、それに切り込む筆者の視点と論点はきわめて鋭く、ヒリヒリするようなリアリティがある。疑問や迷いが新たな表現とエネルギーを生んでいくハイブリッド的なあり方は、容易に予想しづらい今後のパワフルな展開と期待を感じさせる。学位にふさわしい充実した論考として、審査員一同の高い評価を得た。

（作品審査結果の要旨）

王易木の博士審査において、作品第一副査を務めました私から作品審査に関する報告を述べます。

王易木さんの提出作品は、『The Facets of Boundaries』。展示された作品はドーローイング、立体作品、映像作品によるインスタレーションによる構成となる。

私たちの世界の在りようは、常に可視不可視の境界をもって分かれたる可能性を内包しつつ連続している。そのような世界の在りようはさらに個人と個人を取り巻く日常の在りようにそのまま重なる。だが、事の大小になぞらえて一概に個人の日常が世界のひな型であり、かたどられ縮尺された世界サイズとして日常があるのではない。一個人の或る行為が日々のその者の思考と手によって創出される一つの表出や行動、出来事が大きな世界そのものの現れとして私たちの前にその在りよう、姿を見せることがある。そのきっかけは自身の足元からどこまでも継ぎ目なく延び広がる場や時間のなかに既に予兆として分離や転換の期を孕んでいる。彼女の制作はその始発に自身の生い立ちの背景としての国、言語、属性などアイデンティティが日常のなかでの問いと認識に端を発している。そして問の方法、認識の仕方として美術を選ぶとき、メディウムとして様々な表現が様々な素材をもって展開されてきた。作品制作は常に言葉と意味、文字と形象、自然と人工、平面と立体、表象と実体等それぞれが対立概念としてあるのではなく、兩岸を往還する通路、回路としてのメディウムの役割と構造について視覚的、思索的に創造されている。自身の体験と記憶が現在の日々の中で幾度も喚起され常に彼女の思考と制作を深め同時に瑞々しいものにしている。論文では芸術表現における作家の制作原理とモチベーション、創作上の問題点が精緻に論述されている。それに比べ、今年になって試行され出てきた作品のいくつかは素材の扱い、組み立てにまだ改良の余地があるように思われ、審査

講評でもその点が指摘された。また展示は館内の狭い空間的状况において他の学生との作品との距離も詰まっている印象が気になった。別な機会でも再度空間構成を練って展示することをすすめられた。タイトルの提出作品は木の枝を布に象りそれに彩色を施したものを天井から吊るし机上のグラフィットで描かれたドローイング面に接しているという構造を持つ。枝の形状と描かれたドローイングの線描が触れ合い、二つの異質が境界を無化し一瞬混然とした様相をつくり出している。これについては空間的な表現として「彫刻」という形式を必然的に想起させるとの意見があり、作者にその意識についての質問も出た。また、新作のなかで文字をトレースする際の映像作品は本人がこれを制作したことで発見したことが報告された。記述とトレースでは、紙にあたる筆記具が行為の際に音の有無が生じるという体験であるが、このことは当作品の特徴というより“人の行為が表出、消失”を現象させる装置として今後の更なる展開と深化に期するものがある。

ともあれ、作品はいずれも彼女の長年の思索と制作の時間と経験を体現し優れたレベルに達しており、多くの可能性を感じさせて今後の展開が大いに期待されると審査員全員の意見に一致した。以上のことから王木易さんの作品を本審査において合格と判定した。

(総合審査結果の要旨)

本論文と作品は申請者である王木易が絵画を実現するためのプロセス的実験として理解される。王木易にとって絵画の実現は、自己確定をしていくことに等しい。これは論文に示される通り自身の生い立ちである中国と日本との往還とこれに伴う使用言語への関、さらに表現者として選ばなおされた絵画、版画という美術の言語へと拡張されていった。

論文では自作の美術表現の展開が問題であり論文題名でもある境界の手触り「——“文字”から晶出／融解する共同体のイメージ」を証明、展開するように描かれ、図らずも境界（国境）を超えてしまったことで起こる共同体の問題としての文字、国家権力そして美術としての表現を思考していく。そして結論としての提出作品「The Facets of Boundaries」の証明へと結実していくのだ。この思索は繊細で緻密さを欠かさずに描き切られたと言って良い。これに対して審査グループは高い評価を与えている。

論文が明快な問題意識の下になされた自作論であることと対応するように、提出作品は美術言語による自己省察としても機能している。しかしこの作品は優れて普遍性を持つことが評価される。絵画には当然多層的な階層があり、それぞれにおいて作品の形式、思想を決定していく。王木易はこれにも敏感であり、それは中国を1つのルーツに持つことでその美術文化である書画の東洋の問題であり、ここに現れる記号性言語性は重要な主題になっていく。ここには、同じ文字文化圏でありながら漢字と仮名文字、意味の一致不一致に伴う翻訳の問題が発生していった。中国語と日本語には第1第2の言語の区別は現れないが、これに第2外国語としての英語が加わり、問題は明確化していった。また第3第4の階層として物質、素材の問題が確実に入り込んでくるが、これにも共同体や権力の影は付きまとうだろう。和紙という文化、唐紙、洋紙という文化は材料を手にとった瞬間から立ち現れるのだ。論文に現れる「掠れて古い塀に同化するようなプロパガンダの文字」に強く惹かれ美を見出す感覚は、一般的な古物や廃墟に対するものではなく本当に境界の喪失の際を見るようなリアリティーを持つのである。

これまでの思索と制作のプロセスと現れた作品は、境界という問題、これは自身のアイデンティティーであれ国家やその中の共同体であれ、これを消失させることでも確定させることでもなかった。文字も言語も絵画という所作も乱暴に捨て去ることは決してなく、緻密に越えていくことと綿密な意図の下に留まることを繰り返していたと考える。「——“文字”から晶出／融解する共同体のイメージ」という題名は、同語反復を複製していくような、版画が翻訳を繰り返し複数として増殖していくような循環をイメージさせる。絶え間ない運動を覚悟する制作と思索の姿を表す本論文と作品を審査グループは高く評価し、博士号に適当と判断した。